

システム基盤「AtlasBase」の活用

Java アプリケーション開発標準 Maia

プロジェクトチーム



■ 日本ユニシス株式会社
ICT サービス本部
サービス商品企画部
サービス企画グループ
マネージャ

橋本 和昭氏



■ 日本ユニシス株式会社
ICT サービス基盤開発部
ICT システム基盤開発室
グループマネージャ

盛田 豊氏

システムの概要

● **システム名称：**
SaaS プラットフォーム
・サービス

● **システム概要：**
SaaS 型アプリケーションの提供に必要なインフラ環境や基本機能を提供し、SaaS ビジネスのコスト低減、早期立ち上げを実現するサービス

● **サービス開始：**
2009 年 5 月～

● **参考 URL：**
<http://www.unisys.co.jp/services/ict/saas.html>

SaaS ビジネスの立ち上げを支援する

「SaaS プラットフォーム・サービス」

日本ユニシスのオープン系システム基盤「AtlasBase」を活用し、品質を担保しながら短期間での開発を実現。

開発の背景

SaaS 事業の立ち上げを支援する「SaaS プラットフォーム・サービス」

システムをサービスとして利用する SaaS (Software as a Service) が普及する中で、SaaS 型サービスの提供に転換を図るパッケージベンダーや、自社のアプリケーションを活用して SaaS 市場に参入を図る事業者も増えている。しかし、自社で SaaS 事業を始めようとする、機器調達から、インフラの構築、運用体制の整備、セキュリティ対策まですべて自社で賅わなければならない、高い参入障壁が存在することは確かだ。

SaaS 事業にいち早く取り組み、ICT ホスティングや SaaS アプリケーションなどのサービスを提供してきた日本ユニシスは、SaaS 市場へ参入を図りたい

事業者向けに「SaaS プラットフォーム・サービス」の提供を始めることになった。SaaS プラットフォーム・サービスでは、ネットワークを強化するための「サービスインフラ」と、アプリケーションの管理・制御に必要な「基本機能」が提供されるため、利用者は導入するだけで SaaS 事業が始められるというわけだ。

日本ユニシス ICT サービス本部 サービス商品企画部 サービス企画グループ マネージャ 橋本和昭氏は、SaaS プラットフォーム・サービスの狙いを「必要な機能・環境を日本ユニシスが提供することで、事業者様にビジネスモデルの構築やビジネスロジックの開発に専念していただくことが目的です」と語る。

AtlasBase の活用

標準化された利用技術や知財・ノウハウが活用可能

「SaaS プラットフォーム・サービス」の開発では品質を担保しながら短期間での開発が求められた。

そこで、日本ユニシスは、同社のオープン系システム基盤である「AtlasBase[®] (アトラスベース)」を活用した。AtlasBase とは、アプリケーションフレームワーク、開発標準、インフラ層の知財などを統合したシステム基盤だ。

AtlasBase を活用した理由を、日本ユニシス ICT サービス基盤開発部 ICT システム基盤開発室 グループマネージャ 盛田豊氏は次のように語る。

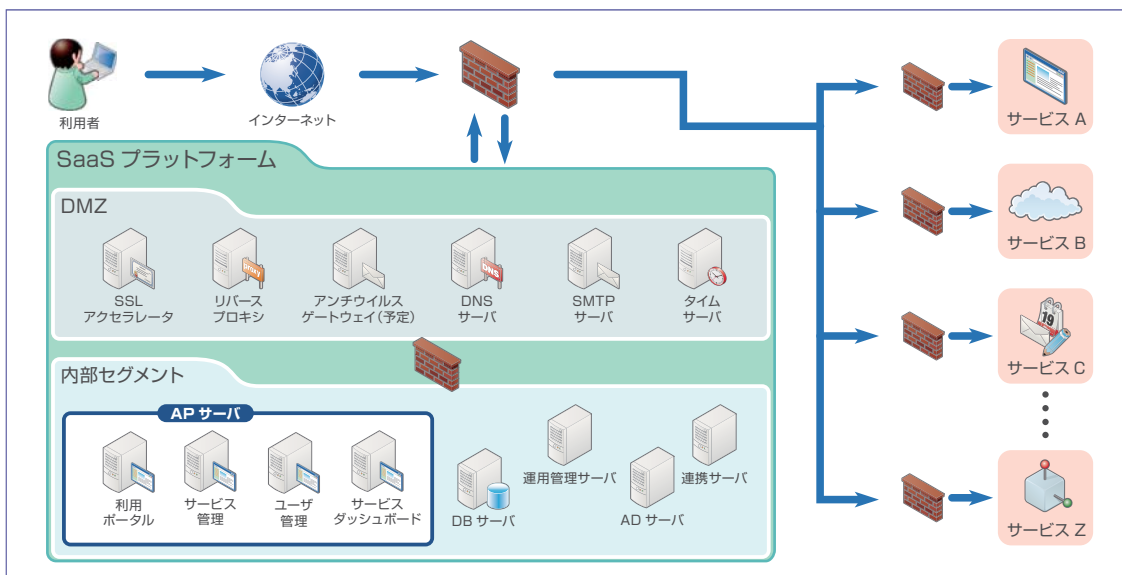
「ソフトウェアやインフラのアーキテクチャが日々進化していく中で、新しい開発技術を検証することなく採用することは高いリスクを伴います。AtlasBase はこれまでの開発で蓄積されてきた技術の組み合わせで構成され、知財化されたノウハウの活用も可能ですので、開発を迅速かつ確実に進めることができます」

「SaaS プラットフォーム・サービス」の基本機能

の開発では、Java アプリケーション開発標準である「MIDMOST[®] for Java EE/Maia[®] (マイア)」を適用した。Maia について盛田氏は「開発設計プロセスや利用技術を統一することで、実現すべきサービスや機能の開発に専念することができます。使ってみると、Maia は使い勝手に優れたフレームワークであることが実感できます。その理由は、堅牢なシステムの開発に必要な共通機能が、バランスよく提供されているからでしょう」と評価する。

インフラ開発では、要求仕様に応じて Linux 基盤の検証済みプロダクトセットおよび開発支援ドキュメントを活用。プロダクトセットの構成がそのまま適用できない場合でも、アーキテクチャを大きく変更することなく、それらの考え方を発展させながら構築している。「開発支援ドキュメントをベースとすることで、技術的なブレや抜け・漏れが軽減され、システム構築時に発生するリスクを未然に防止することができました」(盛田氏)

システムイメージ図



開発のハイライト

AtlasBaseの統一化されたルールを適用し分散拠点における開発リスクを回避

SaaSプラットフォーム・サービスの開発は、サービスインフラを提供する「ライトパック」のプロジェクト(R1)が先行する形で2009年1月からスタートし、同年5月にリリースされた。続いて、SaaS化に必要なアプリケーションを追加した「ベーシックパック」の開発(R2)が2009年5月より本格化した。

R2のメンバーは、インフラ開発・運用チームが10名、アプリケーション開発チームが25名、アーキテクチャ・ビジネス設計チームが5名の総勢40名を一気に立ち上げ、2009年10月のカットオーバーに

向けて臨んだ。

開発拠点は、東京、札幌など複数の個所に分散していた。要件を修正・変更しながら短期間に開発を進める中で、開発拠点の分散は大きな支障になりかねなかったが、「AtlasBaseの統一化されたルールのもと、メンバー全員が共通の言語を使ってコミュニケーションを図ることができたことは、分散拠点における開発リスクを解消するだけの成果につながっています」と盛田氏は語る。

豊富に蓄積されたAtlasBaseの技術と知財がインフラとアプリケーションの連携を強化

SaaSプラットフォーム・サービスは、インフラとアプリケーションが密接に結びついたサービスだけに、開発ではインフラとアプリケーション連携を重視する必要があった。個々のサーバーやプロダクトが十分な品質を保っていたとしても、組み合わせた瞬間にトラブルに見舞われるケースも珍しくないだけに、連携は困難を極めるのが普通だ。その点、AtlasBaseはアプリケーションとインフラを組み合わせた状態で検証され、利用技術を蓄積してきたシステム基盤だけに、連携のノウハウが多く詰まっている。そのため、インフラとアプリケーションの連携においても作業の抜けや漏れが発生しにくかった

という。

開発チームが複数拠点に分散している体制では、共通のルールが整っていたとしても、細かな調整で支障が生ずるリスクが残る。プロジェクトでは、インフラとアプリケーションが密接に関係していることを考慮し、日本ユニシス内の開発拠点(東京、札幌)それぞれにインフラ開発とアプリケーション開発の両メンバーを配置することで、機能連携をタイムリーに反映させ、アーキテクチャの大枠部分で齟齬が生じることなく、各拠点横並びで開発を進めることに成功した。

Maiaの適用でビジネスロジックの構築に専念

Javaアプリケーション開発標準Maiaの適用については、協力会社を含むアプリケーションエンジニアが集まり、開発経験者が講習会を実施することで、統一基盤で開発に取り組む体制を整えた。

「Maiaの中で使われている個々の技術そのものは標準的な技術をベースとしているため、初めてMaiaを適用する技術者でもスムーズ

に習得できます。開発がスタートしてからも、アプリケーションの機能変更は何度も発生していますが、一定のルールが確立されているMaiaなら混乱することはありません。開発のアーキテクチャを変更することなく、ビジネスロジックの構築に専念できたことは、大きなアドバンテージとなりました」(盛田氏)

効果と今後の展望

日揮情報システム様が設備保安全管理システムをSaaS化

日本ユニシスが開発を行った「SaaSプラットフォーム・サービス」に対して、外部の事業者および日本ユニシス内部から、数十件を越す引き合いが寄せられている。その中で、日揮情報システム様が、工場向

けの設備保安全管理システムにSaaSプラットフォーム・サービスを採用し、自社サービスとして提供中だ。

適用範囲の拡大をアピール

「SaaSプラットフォーム・サービス」の展望としては、インフラ機能、アプリケーション機能のどちらも、SaaS以外のサービスに活用できるだけの柔軟性を備えているため、適用範囲の拡大を図っていくという。「SaaSプラットフォーム・サービスの利用対象は、SaaSの事業化を検討されているお客様だけに留まりません。純粋にWebアプリケーションを利用したいお客様、SI事業を展開したいお客様にもご利用いただくことが可能です。また、SaaS型サービスの本格導入以

外での活用も可能であり、実際、「遠隔地でのパッケージ製品のデモにSaaSを利用したい」「メディア送付のセキュリティリスクをSaaSで回避したい」といった用途での問い合わせも多く寄せられています。当社はSlerとして多くの情報会社様とも幅広いおつきあいがありますので、企業内部向けのサービス基盤、開発基盤などにSaaSプラットフォーム・サービスが活用できることを積極的に提案してまいります」(橋本氏)